

前任職卓明法師還浄す



親鸞聖人の足跡を辿る旅。新潟県の居多ヶ浜で笑顔の前任職

補陀落山覚浄寺の第十八世住職（前任職）の安食卓明法師（法名 浄楽院釋卓明）は、五月十七日に今生のいのちを終え、お浄土に参らせていただきました。

あいさつは決まって「ニーハオ！」「謝謝（シェシェ）」「再会（ツイチエン）」と言うほど中国が大好きで、毎日、中国やシルクロードのDVDを見ていました。お講さんの法座では会員の皆さんと毎月楽しくおしゃべりをし、天気の良い日は手押し車で散歩したりしていました。その姿や声を直接見たり聞いたりすることはできなくなりました。

父、卓明は、昭和十年に父鳳城と母ゑいのもとに生を受け、戦中戦後の貧しさの中、母親を早くに亡くしたこともあってご門徒や有縁の皆さまに助けられ育ったと聞いています。昭和三十五年に妻、通子と結婚。僧侶と教育の二束のわらじでしたが、退職を機に布教使の資格を取り、あちこちのお寺でお取次ぎをするなど精力的に伝道に努めました。

お寺にお参りできない人にも仏さまの教えを伝えようと始めた寺報「清浄光」は、最近では目が見えにくくなつて苦労しながらも、先月の二二六号まで執筆を続けることができました。

東日本大震災のあと、東北にも出かけ、皆さんから預かった募金や千

羽鶴、復興応援のメッセージを書き込んだ大きな幕を届けたり、海外の貧困にあえぐ子どもたちを支援する里親になったりするなど、社会活動にも積極的に関わっていました。

一方で、定年退職してからは病気とともに過ごす人生でした。頭の先からつま先まで手術してないところはないのではないかと思うほど何度も入院し、長いときには一年以上も病院でお世話になりました。晩年はヘルパーさんやデイサービスなどにもお世話になりました。そんな中でも、ほかの入院患者さんにお話をしたり、浪曲を披露したり、歌を歌ったりするなど、とても充実した日々を送っていたのではないかと思います。

本来であれば、本堂にて葬儀を執り行い、皆様にお礼を申し上げますべきでしたが、コロナの感染がひろまっていることから親戚のみにて葬儀をさせていただきました。通夜・葬儀には門徒一同から生花をお供えいただき、代表として澤泰人さんと田中三郎さんがご会葬くださいました。コロナが収束すればあらためてお勤めをさせていただきますたく存じます。この場をお借りしまして、皆さまにお礼申し上げます。ありがとうございます。 住職 南無阿弥陀仏。



雪の医王寺と高時川

絶景！お寺めぐり(医王寺)

湖北は観音様の里として知られています。木ノ本駅からさらに奥へ、高時川沿いの狭い道を登っていったその先の大見地区に医王寺のこじんまりしたお堂があります。真言宗のお寺で、住職は居られず地元の方が大切に守っておられるそうです。私がお参りしたときは、まだたくさんの雪が残っていてお堂に近づくのも大変。さらに、残念ながらコロナ対策のため中に入れず外から拝ませていただきました。そんな山里の小さなお堂に平安時代の作とされる観音様が安置されています。昔は病気になっても注射や薬があるわけではありません。仏さまのお力にすがりたいと言う願いから医王寺という名前になったのかもしれません。病気には薬師如来が有名ですが、さすがは観音の里。ここでは観音様が守ってくださいているのですね。(住職)

六月(水無月) 予定

二七日(日) お講 十一時

予告

秋季永代経・虫供養

七月四日(日) 一三時半

*お勤めのみ。コロナの状況により変更の可能性があります。

暮らしの中の仏教語

『勝利』

ビジネスでもスポーツでも、相手に勝つことが求められる風潮があります。人生でも「勝ち組」「負け組み」などと言われたりしますが、そもそも私の経験では「負けた」ことの方が多いですし、「己に勝つ」といって勝ったためしがありません。

*

仏教で言う「勝利」の本当の意味は、「勝(すぐれた)」「利益(りやく)」のことです。すぐれた利益とは、仏様のお慈悲そのものであり、ほかの人と比べる必要のないものです。もちろん、互いに競い

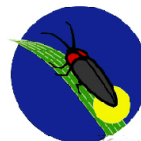
あい高めあうことは大切ですが、勝ち負けだけにこだわるのではなく、相手を敬う気持ちを持つことが大切なのでしょう。サッカーでは、試合の相手を「敵」と呼ばずに「相手チーム」と呼ぶそうです。それは、相手チームの選手も監督も、審判も、サポーターも、みんなサッカーを愛する仲間として尊敬しあうことを目指しているからだそうです。最近では「コロナに勝つ」という発言もよく耳にします。オリンピックを予定通り開催することがコロナに勝った証となるかどうかは疑問で、平和の祭典であるオリンピック・パラリンピックの精神はすべての人が享受すべきものです。今一度、延期なども含めて真の意味の勝利を目指したいものです。

*

前任職は、晩年、足が弱ってきたためリハビリのフィットネスに通っていました。江戸時代の平均寿命が三〇歳位だったことから考えても、高齢者になって病気になったり体が弱ったりしてくるのは当然のことです。一方で、人生が長くなればなるほど知識や経験は増えて円熟味が増してくると言います。小利(しょう

六月(水無月)

ほーほーはたる来い
あつちの水はにがいぞ
こつちの水はあまいぞ
ほーほーはたる来い



り)をすてて勝利に気づく。人生を重ね「老い」とは敗北ではなく勝利への歩みと言えます。お浄土へと歩ませていただく人生の中で、南無阿弥陀仏に出会わせていただくこそが、まさに「大勝利」なのでしょう。(住職)

お速夜参りについて

前任職が、毎朝、本堂でお勤めさせていただいておりましたお速夜参りにつきまして、住職が平日常に勤めておりますことから、引き続き本堂にてお勤めさせていただきます。ご了承くださいますようお願い申し上げます。

